

って壕の入口にいた人びとは、無惨な大量殺戮が行なわれたようである。

また新垣タツさんの記録にウンザー壕という壕が語られるが、壕の中に川が流れていたり池があったり、珍らしい横穴壕が何百メートルかしらないが、地下を通っているらしい。

新垣タツさんの記録は、僅か四百字詰十六枚そこらの短いものであるが、注目に値する重大な問題も含んでいる。九人家族から数年十七歳と十六歳の孤児二人だけが戦争から生き残っている。戦争のために、父母と五人の兄弟を僅か、一、二か月の間に失い、孤児として成人するということも人の心にとまることではないだろうか。

新垣 カメ(四十一歳) 主婦

艦砲が始まった時には自分の部落の後の壕に入りました。アバサーガマといいますが、家がなくなつたのは、艦砲がはじまってから、しばらくは経っていました。が何日ということとはわかりませんが、大体十日くらい後だと思えます。

とにかくおうちが無くなつたものだから、自分のうちでは御飯炊きもできなかったので、アバサーガマの近くに姉さんの家がありましたから、艦砲が止んだ時には、姉さんのうちへ通つて、ご飯炊きして、激しくなつたら壕の中に入って、そうしている中に、春子という自分の娘が亡くなったので姉さんの家から葬式しました。あの日はずっと病氣していたので、姉さんのうちで亡くなりました。自

註、伊敷実さん

説明。アバサーガマというところは、艦砲が激しくなつたので警防団が利用したり、また前線から来た兵隊が利用したりして一般民は入れないようにしたので、別の壕に移動したのです。そのためにあちこちに別れて行つたわけです。

カメさん そうして部落の前の壕にしばらく住んでいましたら、自分たちの壕のそばのふたところに爆弾が落ちました。その時は、避難民が大勢来ていましたが、壕はいっぱいになって、そこにいた人もいました。男の人たちは壕さがしに行つておりませんでした。妻は残されておりましたので死んだ人もおるし、怪我した人もおりました。子供は生きておるが、母親は破片に腹をやられて死んで、それでお母さんのおっぱいにすがつて泣いている子供たちもおりましてね。男の人は帰つて来ると、子供に「お前もお母さんといっしょになつていたらよかつたのに」という人もおりました。自分の兄さんもおいっしょでありましたが、兄さんは拳と頭と二ところを破片にやられて、私も頭の右がわを爆風にやられたので、ちょっと耳も聞こえなくなりました。

あの時は三歳になる娘をかかえて、この壕から出ました。そうして人の屋敷の大きな木の下に、昼は暮して、それから時間が経つてから人に目立たない奥の屋敷の大きな木の下に、二、三時間くらいいて、また自分のうちに戻つて来て、今度は、三男西川門イリカシノという家の屋敷に壕がありますので、そこに入りました。

その壕にいる時、大人の人たちが、「あなたがたの子供、あんまりこんなに泣くから、あなたがたの子供のために、壕の人みんなが大変になる」というたもんだから、自分たちはこの戦で、どうにもな

分はこの子も抱えて、二人の子供を抱えて、壕と姉さんの家とを行つたり来たりしていました。

妹とおばあさんに、壕で子供たちを見せて、たまには妹とわたしと二人、畑に行つて芋を取つて来たりして食べ物を持って行つたりしましたが、わたしが炊事をして壕へ行つて、また姉さんの家へ帰つて行つたら姉さんが艦砲にやられていました。艦砲は家のそばに落ちていたのですが、破片が飛んで来て姉さんはお腹をやられて、腸なんかも出ていました。その時は大雨が降っていました。妹が畑に手掘りに行つていたので、自分は被りものを被つて(傘をさしたのではなく、浴衣みたいなのを頭から被つたのだと推察される)畑までさがしに行つたら、畑には、いないで、自分の壊されたおうちに鉞や鎌を置いて、いませんでしたが、雨がやんだので、また行つて見たらほかの壕にいたといつて帰つて来ていました。あの時は自分の兄さんも元氣でありましたからね。それで姉さんを、少し傾斜した畑の真中に蘇鉄がありました。それを利用して葬りました。その時三人の兄弟は、この戦争は大変な戦争だが、三名の中、誰か一人は生き残るだろうから、生き残る人が姉さんの跡片づけはやるようにしようね、といつて、姉さんを埋めてから上つて来ました。

それからこのアバサーガマにも入れないようになつたもんだから、自分らの部落の前の道のそばに穴があるので、あつちへ夜から行つて、あんまり暗いもんだから何か入つてはいないだろうかといふさんに様子見ていらつしやいと、誰れも入っていないよといつたもんだから、夜からあつちへ移動しました。

それなら、あの焼夷弾を落とす飛行機がこつちへ来てから、それを落したので火事が出はじめて、向こうまでパラパラ、パラパラ、家一つも残さないような火事が出ておりました。この火事が出たとき、飛行機は上から飛んでいましたよ。わたしはこの飛行機を見ながら、この子供等二人をつれて、いま壕へ入ると壕を見つけれらるからと思つて、蜜柑の木の下の下に坐っていました。そうしてましたら、カミーシル小(屋号)のおじいさんがおうちから、わたしの名を呼んで、「おい、カメ子よ、クシンナカリ(屋号)は火事出ているよ」といわれたから、「おじいさん、あれは大変だよ、飛行機が飛んでいるから今壕に入つたら大変だよ」といって、おじいさんを自分のいるところに待たして、飛行機が飛ばなくなつてから、このおじいさんも壕に入りました。

それからわたしもこつちではいつまでも子供たちを遊ばされないと思つて、壕に自分たちも入りましたが、子供たちがあまり苦しくうであつたので、また壕から出ました。そうして、子供一人は負んぶして、ひとり抱っこして、自分の部落の前に甘蔗畑がありましたから、この小さい子供たち二人をつれて、三つに四つですから、

一人は負んぶして、一人は抱っこして、甘蔗畑から甘蔗を折って来て、またこの空屋敷の蜜柑の木の下に来て、甘蔗の皮を剥いてやって、遊ばすのですが、また夕方なったら洞窟の中に入って、それを繰り返していました。この壕は水はない。食べ物が無くなったら後は水を飲んで生きられるからと思って、トドロキの壕へ行きました。水のある壕をさがして行かねばいけないと思ってあの壕に入ったんですよ。

そうしてトドロキの壕に入ったら、あっちへ自分はお米を持って行ってたが、兵隊に取られたか、誰に取られたかわからなかったが、持っていた食べ物ほとんど取られてしまつて、豆とハッタイ粉だけが残っておりまして。ハッタイ粉は砂糖と交せて、一斗罐に持っておりまして、豆は炊いて食べることができませんでしたので、ハッタイ粉を水に溶かして食べておりました。

そうしておる時に、友軍の兵隊が「三歳以下の子供を連れている人は出なさい」といいましたので、わたしは、四歳になる子は姉さんのうちで亡くなりましたが、三歳になる子はつれておりましたので、出ました。そうしたら、友軍の兵隊は、「年が若ければ子供はいくらでも産むことができるから、三歳以下の子供は自分自分で始末をしないさい。そうしないなら、こつちが斬り殺して捨てるから」といいました。

そう言われましたので、自分の産んだ子を斬り捨てさせるわけにはいかないからと思って、自分はこの子をつれて、壕から上に出て、左がわに壕がありますよ。壕といつても大きな岩の下のへこんだところですが、こつちに入つておつたら、あまりグラマンが激し

木造の家の造作のように薄いもので、この上に艦砲でも爆弾でも一発でも落ちたら、この壕の大勢の人が全滅するがねと思つていますが、その中にはまた、何といひますか背癩みたような肩に掛けて持つもの、急造爆雷というのですか、あれも沢山積んでありましたよ。この壕の中には。その壕にわたしたちは避難していましたがね。でもまた宇江城のお家にご飯炊きに行つて、この三歳になる子供を負んぶしていてご飯を炊いていると、門のところに艦砲が落ちたので、これは三つ四つ落ちるといふが、このままにしていはいかないがと思つて、自分は炊事場に子供を負んぶしたまま匍つてしばらく様子を見ていてから、こつちから逃げ出した。自分たちの壕へ行く途中に桶がありましたよ。その下に入つて避難して、艦砲がすつかり止んでからマヤー壕に戻りました。

しばらくこのマヤー壕に避難しておりましたが、夫が来て、そこは危いからみんな大隊本部の壕にきなさい、といつたもんだから、あつちへ行きました。そうしたらあつちはいっばいしてしまいました。わたしたちのお父さんは、怪我していてね、手も貫通されて、顔も頭も、怪我していました。そこでしばらくいきましたが、こつちも激しくなつて、また浦添の方からの兵隊さんが大勢来るというので、兵隊といつしよにいと却つて危いと思つて、またトドロキの壕へ行きましたよ。そうして行つたら、自分たちは、いっしよになつておつたよね(同席の伊敷実さんへ呼びかける)。トドロキの壕へ来たのは二回目になつていたんですが、わたしたちが来ない前に、アメリカはもうこつちに来ていたんですね。アメリカが壕の口に最初は爆雷を入れてそこにいた大勢の兵隊たちがやられたそ

く飛んでいました。ここは、兵隊も避難民もいっばいしてしまいましたので、飛行機はそれを目がけていますから、爆弾を一つ二つ落したからこつちにいる人は全滅するよりほかはないと思ひました。それで、こつちにも死ぬんだし、同じ死ぬなら、もう斬られて死んでもいいから壕に入らないといけないと思つて、命がけに壕の奥へ行つたら、下には兵隊さんが入れないように守つて、塞いでいるもんだから、自分たちはいま入らないと、あのグラマンがあんなに飛んでいるのだし、爆弾をいま落したら死ぬよりほかはないと思つて、斬られてもいいからと、押し落して、下の方に、力いっばい自分は命がけになつているもんだから、押し落したら、ぐつと下にさがつて道が開いた。それで上につづいていた人たちも、みんなこの壕に入るようになりまして。

そして入つてしばらくはこつちで暮しておりましたが、そこから出されて、ウッカーの東がわのウンジャーというところ、糸洲の裏のウンジャーという壕に入つて、あつちに入つて夜は自分の畑に芋掘りに来て、照明弾なんか上がった場合は、畑に伏せてから、その明りがなくなつて芋を掘つて、穴のいっばいずつ持つて、それは自分の部落の姉さんの家に置いて、煮てから壕には芋を持って行つたりして、しばらくは、ウンジャーの壕に住んでいました。

そうしたらわたしたちのお父さん(夫のこと)は防衛隊で宇江城におりましたから、防衛隊の家族は大隊本部の前につれて来なさい、こつちが保護して上げるからと命令があつたということで、みんなつれに来ておりましたよ。そうして、最初は宇江城のマヤーガマというところに、マヤーガマというところは、下は広いが天井はうすです。その後でドラム罐にガソリンを詰めて、あの時にトクミイジ(屋号)のウシーお母さんたちは焼死にしましたね。ドラム罐いくつと言つたかな。

そうして前の方の部隊はやけどしていたもんだから、こつちではあぶない、奥の方に下ろうといつて、奥というより中の方にね(そういう時は、実さんに訊くように)、あつちにはしばらくは避難して、もうこつちでもよくないからといって今度は奥の方に、水をこれくらい(足のくるぶし)ついて、その時からはいっしよでしたね(また実さんへ呼びかける、実さんも、あの時からいっしよだったという)、上から垂れた石をつかまえて、奥の方へ行つた。あつちでは長らく避難しておつて、夜も昼もわかりません。水は自分たち最初、桶があつたね(実さんに確める)。それに上から落ちる水を溜めて飲んだり、またご飯炊いて食べたりにして、またそれで間に合わなかつたら、上から流れて来る水なんかも飲み、飯を炊くには、豚脂のある人はそれで炊くし、水の上に浮いている板を割つて……。

実さんが代つて説明。包丁でその板を薄く削つて、それに豚脂を塗つて、ですよ。これも脂がある間は燃えるが、あとは無くなるよと燃えないですから、煙が立つわけですね。それが、みんながいっしよになつた場合には煙がいっばい立ちこめて、臘燭がつかなくなるわけですよ。明りも近べんしか見えないうですよ。窒息するんですね、それでご飯も炊くな、自分の前が見える程度の火をともしせというふうになつたですよ。それからもうご飯も炊けずに、今度は、あの大豆ですよ、豆ですよ、これを火の中に入れて

て、脂がジイジイ沸ぎるのに焼いて、それを食べていたわけですよ。

そんなにして、しばらく避難してましたら、もう自分は元気がなくなつて夜も昼も眠れないようになっておりました。衰弱しておつたのでしよう。水に漬かり通しではありません。水の中を出はいいりしてゐるのですけれど、上からはずつと水が落ちつづけていますし、しよっちゅう濡れたものばかり着けておりました。鎧を一枚持っておりましたが、これも濡れて、そのままですよ。そうしていら、子供も、顔が見えないもんだから、ずつと首筋から脊骨へ手で、脊骨がどれくらいとんがっておるかねえ、子供はどれくらい瘦せておるかねえ、とさわつて見たりしました。わたしはもうおっぱいも出なくなつてゐるもんですからねえ。絶えずこの子の心が心配になつておりましたよ。

この子は食べるものではありませんでした。ミルクも盗まれて、大きなミルク、これも闇(統制の目をのがれての秘密売買)で買つてありましたが、二個、これも盗まれてしまつて、味噌汁や、お粥を炊いて食べさせるようにしましたが、この子は、まだおっぱいばかり飲んでいましたので、食べ物あまり食べませんでした。

子供はほとんど自分の背中に負ぶつていたので、顔も見られないので手でどれくらい瘦せてゐるかねえ、と顔も絶えずさわつていましたが、わたしもあとでは元気が無くなり、その時はこの子供を自分のそばに寝かしていましたが、そうしましたら、わたしは気を失つたようになりまして。気がついたら、そばにくっついて寝かしてあつた子供がいません。下に落ちて行つたのがわからなくなつ

つしよに、女もよ。

寤さん そうです五、六名くらい。途中まで出て行つてからこで止められたんです。みんなで相談して出るようになっていたんですが、夜の十二時に来いというのを昼の十二時と間違えて、後ろの方にも戻れないし、時間もわからないし、それであつた夜の十二時にしか出ることはできないから、帰りなさい、というので、じゃあもとのところへ帰るくらいなら、この水の中に漬かつて一夜を明かしていいからというので帰らないで、水に漬かつていたわけですよ。

カメさん その時、友軍の兵隊たちが言うたんですよ。「あのね、あなたがた出たら、若い男はね、松の木に手をくくりつけて釣るし上げたり、それからさんたま取つたり、また若い女は慰安所につれて行かれるよ」といったもんだから、わたしは慰安所というのをわからなかつたので慰安所というのは何かと言つたら、「慰安所をわからないか、アメリカのオモチャになるさ」といったもんだから、それでは大変だなと思つて、でもこつちで死ぬよりは、「日の光」を見て死んだ方がいいと思つて、あれ沖繩の娘たちだったね(実さんへ)、若い女たち看護婦と若い兵隊さんたちが五、六名くらいおつたので、あれたちのところにちよつと休んだ。あの時は子供は死んでいましたよ。この死んだ子供を一日半ぐらい抱っこして水の中に漬つて来たもんだから、もう今日出るという時から、いい匂いはしなかつたんですよ、自分の子供ですけれど。しかしこの子供はずつと自分の体の熱で温めておるもんですから、固くはならなかつたんですよ。生きた人のように柔かかつたんですよ。

たのです。秋子といいましたが、手さぐりであちこちさがしてもおりませんので、お父さんに、「秋子は、わたしのそばに寝かしてあつたがいなくなつたよ」といいましたが、わたしも元気がなくなつていましてかねえ。そうしたら、お父さんが、「ああ、いないのかい」といつてさかし、そして上から流れてゐる水際まで落ちて行つておりましたので、わたくしのお父さん(夫のこと)が行つて下からつれて来ましたが、この子はそれから二、三日経つてから亡くなりまして。泣く声もなくなつておりました。しかしおっぱいを含ますと吸いおつたんですよ。

実さん 発言。乳呑み児は、元気を失つて、泣き声もなくなつて、それから、いつの間にか亡くなりましたよ。

カメさん そうしましたら自分の夫が、「どうだもう特攻隊しよう」というんです。そとに出ることを特攻隊といつていました。それでわたしは、「お父さん、あなたがはじめに死んだら、もうわたしもおしまいですよ、出ではいけない」といいました。

「特攻隊というても、あつちの様子を見に行くのだから、出られるようであつたら、あなたがたをつれに来る」といいましたが、わたしは、「あなたが死んだらわたしもおしまいですよ、それならいしよに死んだ方がいい」と同じことをいいました。

そういつておりましたが、いつの間にか、みんなが、「こんなにしていて暗いところで死ぬよりは、自分たちもほかに出て、お日さんを見て死んだ方がいいから、もう出よう」といつて、これから出ることにきまつて、行きました。真中あたり途中に、あの兵隊たちがいたね(実さんへ呼びかける)、友軍の兵隊たちが看護婦とい

それから上の水のない方へ抱っこして来たが、こつちに埋めたら、この壕は大雨になると流されるといふから、どんなにしてでも自分たちのこの子はこつちから出して、自分の畑に埋めようね、自分の畑のところには艦砲の穴があるのを以前に見ていたから、そこに埋めようね、と話し合つて、壕の中には埋めませんでした。

実さん 一日いて壕を出る時は夜明けですよ。その壕は入口は広かつたのですが、出る時は米軍に爆破されて出て出るところは人間が一人匍つて出るくらいに狭くなつてゐるんですよ。そこから一人ひとり手を引つ張つて出して……。 (こゝで新垣さんと実さんが、いしよに出た時の屋号を一軒いっけん数え上げる)。

カメさん いしよに出たのははつきりわかるのは十所帯くらいでした。名城のほかの人はいません。自分たちはずつと後でありましたよ。そうして自分たちが出る時には兵隊は、砂糖甘藷を折つて来て食べながら穴の中に帰つて来ましたが、「もう、夜明けですよ、静かに出なさいよ」、と言つて穴の中に入つて行きました。出る時には、出口に来たら月の光りで明るくなつたね(実さんへ)、月が出ていたね、二十七、八日の月でした。新の何月何日ということはおわからなかつたが、兎に角月が出て、夜明けでありました。それで暗い中に、自分のお父さんと二人で、子供を自分の畑に埋めて来ました。月の出ている様子から見て、旧の二十七、八日の月でないかね、と思つたんですよ。

実さん お父さんやお母さん、病人たちは、元氣のある若いものが土を上げて、その上におるようになります。水は真中から流れているんですが、みんなが上にいたら土がすべつて、上にはいら

れなくなるわけですよ。それで元氣のある者が水の中で土にもたれて寝たり、十二時間くらい水の中で眠りましたよ。岸に腕をかけた、腋まで水に漬って眠りました。やはり眠ることができずよ。水の流れている真中は首まで漬かるくらいでしたよ。ちよっと越して行ったら、坐って休めるくらいの場所もあったですよ。

カメさん 真中におった時ですが。大きな鰻はいないかね、と考えることもあった。出ない前、自分たちは出ると思ってウツカーからアナ川に渡られるからというので、捜しに行かしたし、また天井に穴をあけてこちから出ようと言ってガンガンあけようとしたんだが、穴は上からあけられるが下からはあけられない、下からあけるといって大変苦しかったですよ。

実さん 出口から出たら兵隊が全滅させられるから、君たちはここから穴をあけて出て行け、と兵隊に言われたので、一応やってみるといかにんといつて、穴をあけようとやったわけですよ。下から穴をあけるといことは大変ですよ、石が上から落ちて来て。

カメさん 高い石があるからその上にあがって行ってから、天井あけて出ようとしたら、石だからあとは水の流れているところまで行って、しまいには、岩と岩との下から水ばかり流れているところへ行っていた。

われわれがこの壕を出ている間にガソリンで焼かれた時は、この壕のいっばいだったそうですよ。避難民から、兵隊から、部落の人も、避難民はずつと中頭へんからの人たちで、こっちはいっばいでしたよ。

実さん 首里あたりからも壕を追われて来た人たちが、いっばいで、相当死んだそうですよ。

ビーチ(名城ビーチ)のあるところへ行くつもりであった。その時鍋一つと釜一つは持っておりましたから、妹と隣の子と二人に、夜が明けたら、水汲みには行かれないから、こちから釜のいっばいは水を汲んで来なさいといいつけて、自分等の部落の井戸に水を汲みにやったら、何か浮いているらしいね、と覗いて見たら、へんなものがあるよなので黍で突いて見たら死人が浮いていたそうです。それで水を汲まないで戻って来ていましたから、こちから前に進んで行きました。そうしたら友軍兵隊が何か食べているところへ行き合いました。そこからちよつと南の方に歩いたら浜辺に出ました。そうしたら火を燃やした臭いがするし、またアメリカの匂もするので、何かアメリカが利用しているのではないかなあ、と思つたそうです。もう月は明るくなって、あちこちに砂を盛り上げてあるんですね。何かこれは隠されていないかと思つて掘つて見たら、全部罐詰を埋めてあつたそうです。これは罐詰だといって、みんな持っているが、わたくしは、元氣がなくて、食べたくもない、取つて持ちたくもなかったから、取らなかつたですよ。

そうしてこれを持って、今のビーチのところへ行って見たら、また妹とほかの女の子に、夜の明けないうちに、あなたがた二人行って屋中飲む水を汲んで来なさいといいつけました。そうしてわたしは、藪になった木の下に入っているからね、といつて入っていました。そうしたら後から来た人たちは壕がないから、わたしはどこに入るかね、とみんな困っていましたよ。わたしも自分たちのお父さんが、後になって来なかつたからね。自分のお父さんはどうしたのかな、と心配していると、そこへ水汲みに行つた妹ともう一人

カメさん 自分の隣りに坐っていた人が、この戦は北から来るのから、今度は北の方、山原へ逃げて行こう、と話していましたよ。あの時はこの壕はいっばいしてしまいましたよ(第一回目の話で爆雷とガソリンはその直後に打ち込まれたらしい)。

これは部落の前の壕にいた時ですが、兵隊が来て、民間の人が食物持っておるからわたしは兵隊は食はないでは戦することができない、食物をよこしなさい、といいましたので、わたしは食べ物も命だから、何であなたがわたしたちの食べ物を取るか、この戦は生きるか死ぬか、二つに一つだからあなたが殺すのであれば殺してもいいよ、絶対食べ物にはなさないよといつて頑張っておいたら、自分の兄さんは、兵隊のいうことをきかなかつたら首を斬られるよ、というので、わたしは斬られてもいいから、この食べ物を取られたら、自分の家族、兄弟みんな亡くなるからね、絶対やらないと頑張つてやりませんでしたよ。

註、ここでトドロキの壕の内部についてみんな話し合う。この壕は名城の背後に口が開いているが、そこから、東の方、伊敷部落の方へ通じ、もっとあちこちに壕がわかれていろいろらしい。壕の中に大きな池のようになっているところもあったり、地表に近く、上にいる人の声が開こえるところもあり、新垣カメさんと伊敷実さんたちがいた奥は、トドロキ壕の口から三百メートルくらい伊敷の方向へ行つてだろうとのことであつた。

わたくしたちは、子供を埋めて来てから、小川というところで浴びて髪洗つたり、着物を洗つたりして、濡れた着物をきて、食べ物もないから、水のあるところをさがして行こうね、といつていま

の子と二人が帰つて来て、「姉さん、向こうから兵隊が二人来るが、友軍の兵隊か、アメリカの兵隊かしれないが、二人鉄砲持っているから、姉さん早くここから出なさい」といい、わたしは、「あなたがた二人は見られているから、わたしはこちに入つておると言うなよ」といってこちに入つておりましたよ。そうしたら妹が、「姉さん、あなたこちに隠れておいたら射られるよ、早く出てから姉さん手をあげなさい」というから、あつた時からわたしは馬鹿みたいになつて、手を上げることもわからない。それでわたくしは「いいよ、わたしは手を上げなくていいよ」といいました。ですけれど、あつた時お父さん(夫)の顔が見えなかつたから、「わたしのお父さんはどこへ行つたか」と言つたら、「あなたのお父さんは、北に向かつて自分ひとり走つて行くよ」とみんながいうたので、わたしは妹へ「早く呼び返しなさい、死ぬならいっしょに死ぬから自分ひとり生きようとしてなぜ逃げるか、こちに来なさい」といって呼びなさい、死ぬなら家族全体いっしょに死ぬ方がいいから、早く来なさいといつて呼びなさい」といって呼ばしたら、お父さんも来ておつたんですよ。もうあつた時からは夜が明けて、あつたこちからみんなが集まつて来て、兵隊は鉄砲持つてわれわれに輪をつくらして坐らしてね。最初は男の方、この方は中頭の人であつたが、この人から体操させられたんですよ。体操させたから、わたしは、この人から殺して二番目はうちのお父さんかもしれない、うちのお父さんも大きいから、あの方は一番大きいから、あの方から殺して、二番目はうちのお父さんだと思つていたら、殺しはしない。あのおじさんひとり体操させて、こちから浜辺へつれて行きました。

そうして浜辺のちよつと、上の上につれられて行ったら、あっちに戦車があったんですよ、一台。南と西に向かって戦車があって、この戦車の北がわに一列並びで坐らされたからね。「ああ、やっぱりこの戦車に轢き殺させるためにこっちに坐らすんだね」と思っていたが、しかし兵隊さんがお菓子を出してから一人ひとりにやっただんですよ。わたしたちは、毒くて死なす考えだから、食べるなよ、と行ってみんな食べなかつたので、アメリカの兵隊は、それをあけて食べて見せたんですよ。それで「やっぱり食べ物ではあるんだね」と思ったんですよ。そうしてわたしはまた石鹼を渡されたので、「これは珍らしいね、見ては石鹼のようだが、こんな食べ物があるかね」と思っただけをかがうとしたら、この兵隊が手を招いて、「ノウノウノウ」と石鹼であって顔を洗い真似をしておったんですよ。それで石鹼だねと思いました。

そうして一時はこっちで休んでから、またつれられて東がわに行つて坐らせた。あつちこっちから人を集めて、友軍の兵隊、本土出身の兵隊なんかも集めて、来たら、鉢巻きしてふんどし一本はつけて、軍服はすべて捨てて。そうして、アメリカが、ユージャパニーといったら、ジャパニーでない、オキナワというたら、また一人のお母さんが沖縄の方言で、「ドーリン、ノチダケータシキテ、クインソール」(何卒、命だけは助けて下さい)と、手を合してっていました。

こっちで人を集めたアメリカは、今度はどこへつれて行くのかねえと思つたら、今度は自分等の部落の前からつれて行つて、そこに井戸があるが、その井戸から水を汲んで、みんなかわるがわる飲んでも無くなっているが、こっちで車の上で手を合せて、(両手の掌を合して、拜むこと)「自分たちはどこにつれられて行くか知らんから、おじいさん、おばあさんたちで、わたくしたちの身を護つて下さい」と祈つてからつれられて行つたわけですよ。

伊良波へ行つて、あつちで浴びたりなんかしました。そこで自分のお父さんたちは別々にされてしまつたんですよ。しかしわたしは、お父さんが別べつに別れさせられたとは思わなかつたんですよ。トドロキの壕の口を出ない前、一斗罐の中に、お金やら、それから判、お金貸した証文、貯金証書なんか入れてあつたのを、友軍の兵隊が来るのをアメリカと考え違ひして、それを捨てて無くしたもんだから、「お父さんは、やっぱり無くしたものを取りに行つたんだねえ」と思つて、屋嘉に連れられて行つたのは知らなかつたんですよ。それで、それを取りに行くというので途中で殺されはしなかつたかねえ、と心配しておつたんですが、中頭の方へ行つたら、屋嘉から来た人が、「あなたのお父さんは屋嘉にいるよ」といつて知らされてわかりました。

註、三月十二日(一九七二)。名嘉所長は、本巻の口絵の撮影を、琉球政府行政の広報課へ協力かたを要請したところ、広報課長富川盛秀さんは快諾を与え、その上、同道して頂くことになつた。

撮影は喜屋武岬、喜屋武部落の二か所であつたが、わたくしは、その帰途で、みんなと別れて、原稿制作中の名城部落の新垣カメさんへ、不明のことをただすつもりで、喜屋武へ向こう途中で、連絡を取つておくことにした。今日は昼弁当持ちで畑仕事に

ましていました。自分は元気がなくなつて、みんなといっしょに歩いて歩かせませんでした。

それから、また糸洲の前のアカサーというところへつれて行かれたんですよ。行く途中に自分の兄さんたちの家があります。ビーチに行くところの東がわに、こっちの前に甘蔗みたようなデーク(幹は竹と似て節があり中は空で、葉の生え方は甘蔗にも似ている)がありまして、自分一人は、この中に隠れようかと思つて、

隠れるつもりでしたが、あんまり水が欲しいので、兄さんのうちに行つて、ゴミの入つた汚い水をお皿で汲んで飲んだら、自分一人生きるよりは死なされるならいっしょに死んだ方がいいと思つて行つたら、さつき話した井戸でアメリカの兵隊が鉄砲に紐をつけて水を汲んでみんなに飲ましていたわけですよ。わたくしも水を飲んで、それからまた上つて行つて小波蔵の前をずっと通つて、アカサー壕といふところにつれられて行つて、こっちに収容されてから、自分はもう元気がなくなつていゝもんだから、みんなと別れてひとりであつておりましたよ。

ここで男の人には、君は防衛隊であつたか兵隊であつたか聞きおつたそうです。こっちでしばらくは休みましたが、また喜屋武の学校の下の松林につれられて行きました。歩いてですよ。

こっちでも生き残つた避難民を収容しました。そうしたら、避難民を乗せて行く車が来ていましたよ。こっちで雑話なんか渡されてねえ、食べてから、伊良波の方へ行く準備ができていましたよ。

それで車に乗せられて、伊良波に行く途中で、自分の家のそばを通りましたので、自分の家は道のそばですよ。家も家畜小屋も何も

出かけていられるが、場所は伊敷部落前の古井戸の前、ということであつた。

撮影は、二か所、広報課のカメラマン平良幸七さんの熱心な技術でやや時間を取りすぎた。

それにもかかわらず、富川課長も平良さんも、伊敷の新垣カメさんの畑へ同道すること、わたくしは恐縮したが甘えることになつた。

名城部落の北の旧糸満町よりのバス道から東へ垂直に入る緩い坂を車は走つて、右へ湾曲した道を上りつめると、伊敷部落前の平野が開けている。

部落へ入つて人家もいく軒か通り越し、さらに進んでも古井戸はわかりそうにない。訊いたら、部落の本道から入る農道に沿つて、こんもりとした濃緑の森があつた。部落本道から相当にはなれているが、そこが古井戸だといふ。

伊敷部落前面の平野は広びろと見わたされるが、予期に反して甘蔗は目につかない、ほとんどが野菜づくりと見た。車を農道に乗り入れて、古井戸の森も行きすぎた。広い平野には人影が全くないようであつたが、それゆえに、農道から可なり遠くに二人の畑仕事の人が目についた。新垣さんにちがいないとの直感で、名嘉所長と二人は走つて行つた。そうしたら、富川課長と平良さんもわれわれについて来られた。

新垣さんは、潮来笠のように広い鍔のやや傾めに下つた帽子の下から手拭で頬も包んで人參畑にしゃがんで、仕事をしていたが、新垣さんが「わたしのお父さん」と絶えずくりかえして言

っていられた主人は、一息入れているらしく畑に腰を下していられた。

わたくしは一見して新垣カメさんがわかつて、二十八年前、「お父さんが死んで、わたしは生きてはいられません、死ぬのも生きるのもいっしょですよ」と言っていた、あの時点で常に正しい人間性と情熱を持ちつづけていた四十一歳の新垣カメさんがわたしの頭に浮んだ。そうして今見る顔にもその輝きが光って見えた。

ちよっと思いつかない様子であったが、わたくしが、「お母さん、間もなくご本ができますよ」といったので、じきにわかつて、挨拶を交わした。

わたしはかねて準備してあったメモで、一つひとつ訊ねて、不明の点を明らかにした。広報課長富川さんとカメラマン平良さんも熱心にわたしの疑問解明に関心を寄せていられたようで、みまもっていられた。

二人の女兒を戦争中失ったので、終戦になった時はご夫婦二人だけになった。いっしょであった主人のお母さん（おばあさん）は、中途から、長兄の家族といっしょになって、戦火を無事に切りぬけ、戦後も元氣であった。

長男は九州へ学童疎開させてあったので、現在は、南部の高校で、郷土子弟を教育する地位にある。

わたくしには、戦争で避難していた二十八年前のこのご夫婦の姿を目のあたり見るように、思い浮べながら、挨拶を述べたら、「またいつでも御出で下さい」と素朴な心を現された。先き頃の

ら、どうするかと迷っている時に父が手を上げたもんですから…、しかしこのアメリカ人たちは撃つのは撃つたが、わたしたちが手を上げたらそのまますぐ行くわけですよ。そうして掴えに来るのは、カービン銃をうしろにして肩に引っかけてですよ。それから車に乗せられて行ったんです。

新垣 キク (二十三歳) 家事

わたくしは国頭へ疎開しました。大宜味村の田港へ…家族四人でありました。こっちにずっといたのではありません。

アメリカさんが上陸して艦砲射撃というんですか。艦砲射撃で、もうこっちはいられないから島尻に戻ろうか、どうしようかと迷っていたところに、家族を疎開させているおじさんたちが二人いらっしやっているんですよ。このおじさんたちが、「島尻はどうもないから、島尻へ突破しようか」という話でありましたから、じゃ、女子供だけではどうしようもないから、わたしも男の力をかりて、ついて行こうということになった。途中の何とかいう部落に着きましたら、友軍の兵隊が、四、五十人来ました。その兵隊さんたちの話は、「戦争はもう長くて後一週間だから隠れて、辛抱しておきなさい」ということでありまして、そうですかといつて、この久志村の何とかいう部落に避難しまして、十四、五日はいましたでしょうね。こっちの芋など取って、もうこれが無くなつたもんですから、もうこっちはおられないということになりました。今度はまた金武村の惣慶に下りて来て、また惣慶のものを全部

天気とは異り、快晴の沖繩の春の日であった。

伊敷 実 (十四歳) 小学校高等科二年

新垣さん方といっしょにトドロキ壕を出てからわたしたちは、ばらばらになって別れましたが、トドロキから流れるカド川というところがありますよ。ここで避難民が味噌を捨ててあったわけですよ。ご飯とか砂糖とかはもう食べても苦くなっていったが、ここで水を飲もうとした時、この味噌を水に溶かして飲んだんですが、あれが一番おいしかったですな。まだ子供でしたが、それはいつまでも忘れられません。

これから自分の畑へ行くのですが、その時は稲がよくできていたんですよ。自分等の畑へ行けば、その稲も取って食べられるからといって、下りて行ったんですが、もう日が昇る時刻に近づいていたので逃げる事ができないで、自分の家の甘蔗畑がありましたから、これに隠れておりました。が何と云いますかね、先発隊みたいなアメリカ人が、三十名くらい来ました。わたくしは隠れて見られないつもりですが、この甘蔗は焼かれていますから、頭隠して尻を出しているようなもんですよ。このアメリカ人たちは探知機みたようなもので地雷を探していたのではなかったですかなあ。見らん振りして通って行ったんですが、電波探知機を担いで行ったもんだから、ちよっと思つたかと思つたら、後の六名が、三十発入っている、短かいカービン銃を持って来て、すぐ後からパラパラ、パラパラ、ですよ。それでここで母はやられたんですがね。それか

食べて、またこっちもないからということになりました、名護へ歩取りに行きました。片道七里の道を往復して、芋を取って家族を養っていたわけですよ。

また名護の方も取って無いからどうしようかということになりました、今度は羽地に戻って来て、羽地村の湧川（今婦仁村の誤り）という部落に避難していたわけがあります。そうして避難していません時に、アメリカの兵隊さんに囲まれましたねえ。それで前まえから、女はアメリカの兵隊さんに掴まえられたら強姦されるとか何とか聞かされていたのに、わたくしはもう掴まえていたわけですよ。その時はおばさんたち三人とわたしと四人の家族がいっしょでありましたが、四人のうちでわたしが若かったんですから、アメリカ兵に掴まえられています、その時わたしは、自分の子供を負んぶしてしまいましたので、お母さんを引つ張って行くなら、泣きなさいよ、といったんですよ。一人は妹で、一人は姪だったんですよ。

おばさん引つ張られたら大変だよ。大きく泣きなさいよ、といいつけてあるのに、この子供たちも、恐がって泣かないのですよ。それで自分の負んぶしている子供をつねって泣かしました。子供を泣かしたから妹と姪も涙は出さないでわあわあ泣きました。それからわたしは、おばさんたちにも、おばさんたちは、わたし一人だけを引張り出させる考えですかと、怒ったわけですよ。そうしたらおばさんたちも、大声を出して、助けて下さいと叫びました。

今になってわかりますが、憲兵といいますが、MP、あれの車の音が聞こえたので、このわたしを掴まえていた兵隊たちは、わたしをゆるして逃げて行きました。

それでわたしはその晩は、人の家の床下に隠れて夜を明かしました。わたしはそれから、こんなにしては暮らすことはできないから、自分一人でも、自分の家族だけでも捕虜になって行くからという決心がついたわけですよ。それで、おばさんたちも、あなたが行くなら全部いっしょに行くということで、今度は羽地の田井等という部落に捕虜なつて行きました。

捕虜なつて、一度うちに行つてから、お母さんたちが、宜野座村（旧金武）の古知屋にいましたから、そこへ行っていっしょになりました。島尻へ帰りました。

わたしたちは、最後の疎開で、大宜味へ行った時も着のみ着のままだったのです。

湧川でアメリカ兵に囲まれた時、三人だったんです。それでMPの車音でこの三人のアメリカの兵隊が逃げたんですから、わたしはすぐに民家の床下に隠れたんですよ。

新垣 タツ（十七歳） 家事

わたくしの実家は、小波蔵に近い名城のはしになっていきます。お父さんは、ここに山田部隊（当時県民は隊の大小を問わず部隊といっていた）といつて部隊がありました。この山田曹長さんと、とてもいい、お友達になつてですね、何か軍隊の様子や、大和魂ということなど、山田曹長さんのお話をよく聞いていました。その時は、うちには牛もいればほかの家畜も飼っていましたので、牛も山田曹長さんに、部隊でつかって下さるという上げるといふよう

あの時は月の出ている夜でありましたが、自分らのうちの後で、家族とも話し合いました。お母さんは、いっしょに連れて行くという気持ちもあるようでありましたが、お父さんの言われたように、もう今度の戦争はこの調子では絶対みんなは助かると思われないうから、あなたたち二人は行きなさい、といわれて泣く泣く別れてウツカーという壕へ行きまして、清喜おじさんに預けられました。

別れる時に、もしアメリカの兵隊さんに捕虜取られる、くらいなら、耳も落して、鼻も落して、また女はいたずらするといふ話だから、こんなにされるよりは、これを飲みなさいといつて、お父さんに劇薬を渡されたんですよ。同じ戦争のことだから、もしも捕虜取られるくらいならこれを飲んで死んでくれといつて劇薬を渡されたんです。だけれどうちらはまだ子供ですから、何回もアメリカの兵隊さんが、壕の中に懐中電灯を持って照らして、出て来い、出て来い、と何度も来ましたけれども、その時も、この薬を飲もうという意志はなかったんですよ。死ぬというところは恐いですからね。その時は兄嫁もいっしょでしたよ。

この時自分の弟の三郎は、出て来い、出て来いといつてアメリカの兵隊さんが入つて来た時ですね。うちは足にできものができていて動きができなかつたので、一枚の着物で頭から被つて隠れておつたんです。その時三郎は捕虜取られるといつて、出ているんですよ。友軍の兵隊さんと、アメリカの兵隊さんとの合間にですね。それで、わたしは、「あなたはこの際捕虜取られたら、二人はばらばらになつて、どうしたらいいかわからなくなるから、どうにかして逃げてくれませんか、うちは歩くことができないから、もし

な、よくこの山田曹長さんがうちにいらつしやっていたんです。

それで敵が近づくまでは、わたくしはお母さん、お父さんといっしょでありましたが、敵が近づいて上陸しましたから、お父さんはこうしては、どうしても家族全部が助かるということとは考えられないからといわれました。今度の戦争は、お父さんには、勝つという見込みがなかったかもしりませんがね、みんながいっしょに歩いたら、全滅ということになるかもしれないから、お父さんと親しい、警防団長で区長代理をしていて、軍とも手を取っていられるおじさんに預けようという話が出たんですよ。軍と手を取っているの、安全地帯に戦争を避けられるとお父さんは考えたんだと思います。新垣清喜というおじさんです。

それで、その時からしばらくごたごたしまして、「何で、死ぬならいっしょがよくないんですか」とよく話しましたけれども、お父さんは、「この戦争でみんながいっしょにいて、爆撃されて死んだら駄目だから、二人はわけて、あなたたちが死んだ時は、うちらが葬つてやる、また、うちらが死んだ時は三郎（タツさんのすぐの弟、年子で当時数え年十六歳）と二人で葬り方もさせるといふお父さんの願いだから、それをきき届けてくれ」というたんですよ。自分はその時まだ子供ですから、「こんなに家族が別べつになるより、いっしょに死んだ方がいい」とうちはよく話したんですけど、「こういう戦争の立場に當つて、あなたたちは親のいうことができないなら、もうあなたたちは今から子でもない、親でもないという、あのおじさんと行かないなら縁を切るから、あなたたち自分のいっしょにいなさい」とよく話された。

出て行つて、お父さんがおつしやつたように、女はいたずらして男は耳を落す鼻を切るなどということがあつたら、この際大変だ、わたしは動くことができない、どこへ歩くこともできないからね。どうにかして逃げないとうちらだつて二人バラバラになるよ、とちよつと話したんですよ、手真似も交じて。それで三郎も逃がれて入つて来ました。

それから、この壕の奥の方へずつと入つて行きました。その時、川みたいたるところを渡つて奥の方へ行きましたからね。池みたいな水溜りがありまして、こつちから来る水の流れが激しいもんですから、岩をつかまえて、背中には荷物なんかを背負つて一歩、一歩ずつ、渡つて行つたんですよ、奥の方へ。清喜おじさんもいっしょです。またその時は兵隊さんもいっしょでした。そうして渡つて行つてからは、うちらが食糧や薪も取ることはできませんので、兵隊さんの世話になりました。ずつと奥の方にはまた水の溜つた池があつて、その一方のふちは通ることのできる壕になつていまして、ちよつと上つて行くと、そこに水の溜らないところがありましたので、ずつとそこにおりました。

そこにおりますと、兵隊さんが、「空襲も激しくなくて、とてもシーンとしているみたいだよ」といふ話がありましたので、またこの奥の方から前の方に移つて来ましてですね、川を渡つて来て、こつちで長い間暮しておりました。十月の出る時までです。

食糧は、前住んでいたところへ移つてからは友軍の兵隊さんといっしょに夜行つて、アメリカの雑話なんかを取つて来ました。友軍の兵隊さんは、トラックのいっばいくらいの人数でした。民間の人

は、わたしたちに波平のイク姉さんも、またわたしのいとこの栄吉さんたち。栄吉さんたちは、清喜おじさんに三名預けられて三名、うちらは二人預けられて二人と、また清喜おじさんたちの家族、おばさんたちは先きに捕虜取られまして、清喜おじさんと、清光君と三名でした。それから空襲も弾の音もありませんでしたので、波平のかたも四、五名見えまして、捕虜なって行く時はトラックの半分くらいの人数でありました。

捕虜になりましたのは、伊敷喜清兄さんというかたが、先発隊になって、いらっしやっているわけですよ。壕の入口の方に、竹を二本切って、それに手紙をはさんでですね、もう戦さは終って、みんな捕虜に取られているから、またあなたがたのお父さんお母さんがたもみんな元氣だから出て来なさい、ということ。また清喜おじさんにも、もう戦は敗けて玉碎になってみんな穴から出て働いておりますから出て来なさい、という手紙がありました。兵隊さんたちが、「これはデマかもしれないから、絶対これに迷ってはいけないう、この手紙がいう通り信じて行ったら、すぐ捕虜に取られるから絶対行ってはいけない、」というんです。それで、二、三回そういうことこの繰り返すよなえ。

伊敷喜清兄さんは、捕虜に早く取られたんです。別に学校の先生などではありませんでしたが、名城のかたですから、アメリカの兵隊さんについていっしょに歩かれて、この壕は人間がいる、この壕はいないと、大体見当がついていられたのだと思います。二、三回はそのままほったらかしてありましたが、四回目くらいの時ですかね。「二応何時頃かには出て来て見なさい、いっしょに話し合

ちとウツカー間とを辛かっいで行ったり、薪かっいで行ったりしましたけれども、お父さんたちと別れて、その時からはもうお父さんたちとも絶対あえないわけですよなえ、壕の中に入ったきり、あんまり激しいもんですから、出られないで。

父母一行の動行 それでお父さんたちは、うちの叔父さんのお嫁さん、わたしからはおばさんになります。このおばさんの弟さん、わたくしとは血のつながりはありませんが、この三所帯がいっしょに、今のビーチのあちらがわ、ビーチは手前になっているんですけれど、そこにいまして、暮らしていたらしいんですよ。六月です。玉碎になったのは、うちらと別れてから間もなく玉碎になっているのでないかと思えますけれども、はっきり月日はわかりません、その頃ではないかと思えます。みんなが捕虜取られて行くのを見たそうです。それは、うちの叔父さんの嫁さんであるおばさんの妹おばさんが話してましたけれど、その方の主人がですね、この方が、「早く、もう大変ですよ、すぐアメリカに捕虜取られますよ、早く手榴弾を撃ちなさいよ、と叫びました」ということです。それで、この方がそう言ったのでうちのお父さんも、手榴弾を取って投げたのかもしれないね。

わたしは姉さん（いとこ姉さん、叔父さんの長女）によく訊くんですよ。「あなたたち、うちのお父さんが手榴弾を投げた時に、どうしたの」といったら、「みんなうつつ伏せにしていなさいというたら、子供も親もみんなうつつ伏せになっていたら、バンと大きい音を立てたのしかわからなかった」という話をやるんです。

って見るから、その時にお互に話し合っただけしか実状はわからないから」とあったので、清喜おじさんと兵隊さんが一人、じやまず出て見ようなあとということになって、うちらは出ないで、お二人だけで話し合いに行かれたわけですよ。

それでこの喜清兄さんが、「どこどこから捕虜取られて、みんな中頭や山原へ行っておるけれども百名あたりにししか島尻には人はいない、百名も人がいっばいいるが、住民はみんな働いているんですよ、もう壕に住んでいる方はいないですよ」という話がありましたので、それでおじさんも、星野という代表として行かれた兵隊さんも納得されまして、二日目でしたかね、出ました。車二台でしたから、民間は民間、兵隊は兵隊で、うちらは百名へ捕虜取られました。兵隊さんたちは屋嘉へ行っただけですが、兵隊は二十名くらいでした。民間は十名あまりですね。うちら二人とみゆきさんたちが三名と、おじさんのお宅が何名かおりました。十月の何日でしたか、月夜でしたがね、満月ではないですねえ、食糧取りに行く時に兵隊さんが、眠ってから行こうねえ、電波という線が張られているから、これを足で蹴飛ばしたら大変なことになるので、ゆっくりゆっくり行こうといっって、大変落ちついていました。甘蔗も食べてから壕の中に入りましたから、その時、朝の月夜でなかったかねと思っただけです。晩は洗濯物をいっつも出して干してましたので、それを見当てられて、先発隊もいらっしやっただろうと話しましたけれども。

お父さんたちは、壕で別れてからですね。それからは、あんまり出られないんですよ。その前までは、あまり激しくもないから、う

その時に、うちの兄弟、文子、茂子、エイスケ三名は即死だったらしいですよ。文子はうちのすぐ妹、次女で数え年の十四歳で六年（小学校）を卒業、シゲ子は四女で三年生を終了して、エイスケは戦争がないと、八歳です。小学校へ上っていたわけですよ。

お母さんは手首から切られてあんまり出血したもんですから、おつかさんが、ちよつと水を飲ましてくれよと子供にお母さんが叫びだものらしいですよ。そうしたらいとこの姉さんが絶対お水やらないでよ、というらしいんですが、お母さんがとても苦しうで、何かお水を上げたら楽になりそうなのという気持ちもあつたかも知れませんけれど、着物の懐に隠して水をお母さんに上げたそうです。そうしたらそのまま、その場で、すうつと消えるように亡くなられたらしいんです。その時、手榴弾を早く撃ちなさい、とおじさんも即死したそうです。

そうして、富子と、また叔父さんの嫁さんですよ、それにうちのいとこの姉さん、たけ姉さん、きく姉さんの二人も助かっているわけですよ。もうこれだけは助かったから子供たちのところへ行くことねと話していたらしいんですよ。

それで夜になってから、うちらのところへ来る途中でおばさんもやられてですね。何か合図の弾だったらしいんですが、三発撃たれて後で、うちの富子、妹が額の真中を小銃でやられてしまったんです。三女で十二歳、四年を終えて、戦争がなければ五年生だったわけですよ。

お姉さんの話しでも、その時にさえもお父さんたちが、手を上げて出ていたら、こういうことはなかったはずだけれど、というんで

す。お父さんは、負けぎらいなものだから、いつも大和魂ということが、心の中に残っていますので、とことんまでも負けないで、この合図の弾の時も隠れようとしたからこっちは甘蔗畑の方ですよ、それでおばさんと、うちの三女とがやられて、こっちで二人とも葬られておったんですよ。

いとこ姉さんたち二人は手榴弾の時にもいたんですが、生き残ったんですよ。富子とおばさんはお父さんと二人のいとこ姉さんの三名で葬ったそうです。手榴弾で亡くなった人たちも、ちゃんとわかるように葬ってありました。

お父さんはどこで亡くなったかわかりませんよ。途中でおばさんと、うちの富子が亡くなったもんですから、おばさんが生きていたら、どうにか頼りになって行こうとは思ったでしょうけれども、おばさんも亡くなって、子供たちばかりだから、自分は妻子は死なして、歩くことはできない。みんな捕虜に取られて行くから、あなたたちもいのように捕虜に取られて行きなさい、うちは足の向くままに行くからね、あなた（叔父さんの長女のたけ姉さん）は、この子たち（キク姉さんと七歳になるたけ姉さんの従兄弟）をつれて捕虜取られていよいよにしまさいね、と行ってそれから別れて、上の方へあがって行かれたそうですが、どこで亡くなったかわかりません。

いとこの姉さんはタケ姉さんで、三女のキク姉さん二人は兄弟でやはりわたしのいとこです。次女はわたしたちといっしょに清喜おじさんに預けられていたわけです。

手榴弾で亡くなったおばさんの弟さんのスミ子という、あの時七

たように思われるが、父母弟妹のことを話す時は、絶えず息を呑み、眼を潤ましながらの話であった。

新垣タツさんの記録は、名城の部落座談会でも、その後での追加録音でも、いつも最後になって録音を逸したので、わたくしたち（名嘉所長）は、本月（七一年三月）十八日、お訪ねして、録音した。畑仕事をおつれて来ての録音だった。

歳の子はタケ姉さんキク姉さんといっしょに助かりました。

タケ姉さんに、お父さんは、富子とおばさんを葬った場所を、こっちはどの畑で目じるしはこれこれだから、よく覚えて置きなさいよ、といわれたそうです。

富子とおばさんが撃たれた時は、伏せたそうです。それで、アメリカ兵がいなくなつてから葬ったんだそうです。

お父さんが清喜おじさんに預ける時、捕虜取られるくらいなら、手榴弾であなたが死ぬ時にこの子供たちも薬を飲ましてでも死なすか、手榴弾で死なすかしてくれといったということもききました。この薬は山田曹長さんという方から貰ったと思います。その薬はずっと持っていました。捕虜になる時に捨てました。

お母さんたちの遺骨は、葬った時のまま、ちゃんとありました。それから、うちの富子とおばさんの遺骨も葬った時のままに、奇麗にありました。富子は、前にお話ししましたように、額の真まんに小銃弾が当たって、その弾はそこへは出ないで、頭の中ぐるぐる廻ったのだと思いました。頭蓋骨の中は、ガラガラになっておりましたのに、その小銃弾が入って残っておりました。それで、妹はどんなにか苦しんで死んだんだろうと思いました。

おばさんの遺骨は、どの骨も完全でありましたから、どこをやられたのかわかりません。夜になってやられましたので、タケ姉さんたちも驚いてもいますから、自分のお母さんだが、よくしらべなかつたのではないかと思います。

註、こう書いてあるのを読むと、新垣タツさんが淡たんと話し